

地理学者の地理学

—岩田修二の地理学的思考の原風景—

Geographer on Geography: a case study of forming process of
geographical sense of Prof. Iwata Shuji

野中健一*

NONAKA, Kenichi

Abstract: This study describes the process of forming the geographical sense of a geographer, Professor Iwata through his recalling and proto-scenery maps. His expertise determination, situatedness and his subjectivity are clarified as a life-history study.

Key words: 原風景 (Proto-scenery), ライフ・ヒストリー (Life-history), 地理学的思考 (Geographical sense), 趣味 (Hobby), 岩田修二 (Iwata Shuji)

- I はじめに
- II 少年時代から高校卒業まで
 - 1) 幼稚園から小学生時代
 - 2) 中学から高校時代
- III 大学入学から南極へ
 - 1) 地理学への関心形成
 - 2) 学生生活
 - 3) パタゴニア・南米・ヒマラヤ探検へ
 - 4) 立山研究会への参加
 - 5) 卒業論文
 - 6) 大学院へ
 - 7) 白馬から新宿へ、そしてヒマラヤへ
 - 8) 南極へ
- IV 地理学的思考の原点を探る
- V おわりに

I はじめに

2011年2月22日、大学仕事の帰途、岩田修二先生と池袋の居酒屋で一杯飲む機会をもった。そ

の場で先生から玉稿「パタゴニア氷河研究の萌芽—1960年代の学術探検」(成瀬ほか, 2011)をいただいた。そこに著されていた先生の研究の萌芽とメンバーの協働の形成過程は、さまざまな学問分野の研究者による海外共同調査を実施している私にはたいへん惹かれるものであった。論文を肴にパタゴニアから、ヒマラヤ、南極、氷河地形と先生の研究の経緯をうかがう絶好の機会となった。その店では穴子(あなご)の白焼きや天ぷらもメニューにあった。先生は穴子好きとのことでそれらを注文し、さらに杯を重ね話も進んだ。あなごといえばかつて二人の共通する勤務地であった三重大学時代に縁のある伊勢湾のあなご産地伊勢若松も話題となった。そして、岩田先生の関心やこれまでの多くの人とのつながりは、地理学、人類学、自然科学などに広がった。私にとっては、未知の場所へ向かう気持ち、雲の上の先人との交流や共通の知人との関係、先生方が開拓してきた探検的学術研究史にわくわくした夜であった。帰宅後、すぐに先生に「『銃・病原菌・鉄』に対抗

*立教大学文学部・教授

してぜひ『水・水・酒』を書いていただきたいです！」とメールした。先生の生き生きとした空間や地形のとらえ方と今に至った歴史に感動したからだった。

そして10月25日、私と岩田先生は、11月14日開催の人文地理学会大会エクスカージョン「江戸・東京の粋な世界」企画者として、下見に出かけた。新橋～築地～旧居留地～佃島～月島と歩き隅田川クルーズの乗船場へ行くため、晴海通りに出た。南極観測船は晴海埠頭から出港していることや出港日も近づいていたことから「船内で履くスリッパを忘れた者がいてここまで買いに走ったよ」などと南極にまつわるエピソードが話題となり、今でも南極へ行きたい私はこれまたわくわくした。そして千駄木を出て谷中墓地へ向かう途中、「この寿司屋は穴子がおいしいんだ」と寿司屋「乃池」を示された。池袋で穴子をととても喜んで食べる先生を見ていたので、ぜひ一緒に旅行終了の後西日暮里から引き返した。名物のあなごの白焼きを肴に酒を酌み交わし、「謙虚にして奥深い」と思わず口にしてしまうほどおいしい穴子寿司を食べているうち、「修士の頃通っていた歌舞伎町のバーが今も健在なことを最近知った」と口にされた。店の名は「ナルシス」。先生の若かりし頃の話聞けるチャンスとばかりに、酔った勢いに任せて新宿へ向かった。

ずいぶん久しぶりのことに、店の場所がなかなか分からず、電話番号を調べて電話で場所を尋ね通りまでママに出迎えてもらった。歌舞伎町の中心部にありながらジャズが静かに流れるカウンターの店だった。席に着くなり先生は「私はずいぶん昔にママに会いました」「そのときに私は救われたんです」と話した（写真1）。岩田青年に戻ったようだった。「私はここに修士1年から毎週水曜日に通ってたんです」と。山男と歌舞伎町との思いも寄らぬ結びつきにびっくりした。岩田先生は当時の大学院の雰囲気になじめず、白（サントリー白）300円を2杯とピーナッツ300円計900円で終電までいて、小田急線で下宿へ帰っていたそうである。厳しい教員、うるさい上級生、研究テーマの周氷河地形は特殊で、主流の地形発達史にはついていけなかったというのが

その理由だったが、これは大学院時代多くの者が経験あるであろう。振り返れば新たな研究テーマを生み出す修練だが、若輩者には苦痛でしかない時だ。

1972年12月24日クリスマスイブの夜、この日は常連客への感謝日で、岩田先生も参加していた。ふだんは先代ママが店に出ていたが、当日は娘さんである現ママも出ていた。そしてその旦那もその場にいた。当時岩田先生は根釧原野の地形をテーマに修士論文をまとめていたが、指導教官のひとりから現状では認められないといわれていたため、このままやめてしまおうかと悩んでいた。ママの旦那は、映像カメラマン助手として根釧原野でコマーシャル撮りをしていたため話が合い、その悩みを打ち明けたら、「人になんと言われようと自分の好きなことをやれ」「好きなことを人に示せ」と励まされた。そこで気を取り直して修士論文を仕上げ翌年1月10日に提出できたのだった。

「この一夜がなかったら今の自分はなかった」と岩田先生はいう。苦しみから逃れようとしてつづ、それに立ち向かおうと決めた瞬間をもたらしした希望の場所だったのだ。人生を決めた時と場所の存在は私にも身に染みだ。ナルシスの一夜はおそらく多くの研究者の前に立ちはだかる修士論文の産みの苦しみにあったのだろう。この悩み・苦しみの時期、本当に好きなことがあるか、その原点をもてるかどうか、それが何か、自分自身への問いかけと、その答えを自らどう出すか試練の時である。

岩田先生は「わたしにとっては、自分のやりたいことを中心に据えた暮らしをすることが人生の幸せに思えた」と述べる（岩田、1992）。だが、やりたいことをやって人生を過ごせるほど世の中甘くない。では、岩田先生はいかにしてそれをなしてきたのであろう。

パタゴニアでえんえん歩いた氷河を離れるとき「もっと長くいたい」と思ったこと。それが氷河研究の途に進む契機になり人生を決めた（成瀬ほか、2011）瞬間であった。研究者が研究していこうと決める瞬間は重要だ。なぜパタゴニアに行ったのか、その後なぜ氷河・高山研究へ展開し、ヒ

マラヤ、天山山脈、チベット高原、アイスランド、南極大陸など、ほとんど人が訪れたことがない大自然の中での野外調査（岩田，2011c）を行ってきたのか、これらのフィールドへの関心がどのように作られて、どういう契機で行くことができたのか、一人の地理学者がいかにして形成されてきたのかということが気になりだした。人生も研究も一つ一つの出来事が蓄積され、展開していくものである。それは状況の中で意志決定していく瞬間の積み重ねである。先生の研究フィールドの展開を逆にたどることにより、それが明らかになるのではないかと考えた。

岩田（以下謹んで敬称略）は「地理学者は重要な方法論を科学諸分野に提供する重要な学問分野であり、簡単には地理学の名前は失うべきではない」「地理学的発想と方法の重要性は簡単には失われない」と考えている（岩田，1997）。その岩田自身の地理学的発想はどのように形成されたのだろうか？

岩田は「地理学は、これまでも地理学的発想を育ててこなかったのではないか。多くの地理学者は地理教育によってではなく、地質学や登山、鉄道・切手趣味、昆虫採集によって地理学的思考を学んだのではないだろうか。現在、活躍している地理学者の地理学的思考の修練の場を調べてみる必要がある」と問いかける（岩田，1997）。この問題提起に対し、岩田自身の研究に至る人生、さまざまなフィールドへの展開過程を明らかにしつつ、応えてみたい。

こうした自己形成を考えるにあたっては、子供時代の経験が原風景＝自己形成空間としてとらえられ（前田，1972）、その分析が一つの方法として有効である。過去の経験が今なお鮮明に思い出され描かれて内面化され一元的に構成された原風

景は、その構成に主人公の働きが投影されているからであり、成立を動的にとらえることができる（岩田，1985）。原風景は地図や回顧文などを用いて地理学的にも分析されてきた（寺本，1994；野中，1993）。岩田の地理学的思考を理解するにあたって、岩田自身へのその方法の適用は相応しいと考えられる。それとともに、ライフ・ヒストリー的分析を行う。

本小稿では、岩田の問題提起をふまえて、1地理学者として岩田の「地理学的思考の形成・修練過程」を、自身の回顧から明らかにし、経験がどのようにに関わり、意志決定がどのようになされたのか、その判断材料のつながりと状況を規定してきたものはなにかを、岩田の原風景地図と回顧をもとに検証する。

内容は、池袋の居酒屋（2011年2月22日）、立教大学（6月8日）、千駄木の寿司屋（2011年10月25日）、新宿のバー（同日）、長野の自宅訪問（2011年12月27～28日）でうかがった話や日頃の会話およびメール私信を中心としている。記述に際しては、岩田に内容を確認した上で個人名や情報の記載について了解を得ているが、過去の出来事や人物の思いに関して一部岩田本人の記憶違いや想像もある可能性もあることをお断りしておく。

Ⅱ 少年時代から高校卒業まで

1) 幼稚園から小学生時代

岩田は1946年神戸市に生まれ、中3の終わりに小さな引っ越しを経て、大学入学まで神戸に過ごしている（表1）。第二次世界大戦終戦の翌年、戦争の爪跡が残る時代から朝鮮戦争を経て高度経済成長に至る時期である。

表1 岩田の履歴：誕生から高校まで

年	事 項	世の中での出来事
1946	神戸市生まれ	第二次世界大戦終戦（1945）
1953	神戸市立入江小学校入学	朝鮮戦争（1950～1953）
1959	六甲中学校入学	日本南極観測隊開始（1956）
1962	六甲高校進学	東京オリンピック開催（1964）
1965	同卒業	東海道新幹線開業（1964）

図1は、小学校低学年を回顧すると同時に描かれた原風景地図である。国鉄（現JR西日本）山陽本線と神戸市電の路線（1971年全線廃止）およびその道路が軸となり東西に広がり、北の山、南の海から構成されている。自宅を中心に通った幼稚園、小学校、友人の家、公園、空き地（原っぱ）など日常的な場所が周辺約3キロ圏内にあり、港、船、海岸などの海、そして遠くに六甲山から彼方の山脈へと広がっている。鉄道を見たり、船を見物したり、映画館、散歩したりと、さまざまな活動・場が描かれている。また、個人、家族、友人などさまざまな社会関係を伴った活動がなされていることもわかる。海・町・山という典型的な空間に全方位的な関心と活動がみられ、日常とハレが一つの連続した空間に入らな中で形成されている。遠方に見える山並みは当時では行き着けない「空想・希望の空間」として認識されている。この地図は原風景論や認知地図に接している者が描いたものであり、それを意識した分析的視点や記述が含まれているとはいえ、断片的になりがちな諸活動や要素が身近で濃密な部分から遠景へと拡大し、かつそれが一元的に示されている。環境への働きかけや内面的な心意のダイナミズムも認められる理想的な原風景地図である。なお、I・II・IIIの圏構造は岩田の地誌の基本であり、同心円的地域の認識として、I 経験的空間（日常生活圏）、II 知識空間（特別な旅行や経験で知る空間）、III 想像・神話空間の3つに分類して講義で説明しているものに相当する。

では、この中に見られる主人公の働きが具体的にどのようなされてきたのか、地図に示された描写と活動内容を岩田の回顧からみていこう。

岩田は、昆虫・化石・貝・植物などの生物採集と標本作り、船、鉄道などのメカ、山遊び、切手収集に熱中していた。地図には、好きな遊びやこれらに関する活動が随所に記されている。

幼稚園時代には、子供の遊びの中に虫採りはふつうに組み込まれていた。自宅周辺の焼け跡は米軍接収地で草むらとなっており、遊び場だった。魚採りの網を虫用に改造し、バッタ、モンシロチョウなどを捕まえていた。平野の祇園神社では夏祭りの夜店でカブトやクワガタなど虫を買った。

また、家から徒歩15分のところには自家の土地もあり、この草むらでは自由に昆虫を採集できた。小2の時には、三角缶、捕虫網、展翅板を揃えていた。カステラ木箱を利用した標本箱に整理し、後には標本箱を買うようになった。友人の祖父に連れられて、諏訪山へ行って昆虫採集をした。小学校高学年には、トラップを仕掛けて採集していた。松江にいた義兄のところへでかけ、松江城公園で昆虫採集を行った。その近所の子供が5本つなぎの本格的な網をもって、チョウの通り道を知っていたり、クサギの前で待ち構えたり、糖蜜を塗って採集するのを観たり、休みの時には神戸生物クラブの同定会や採集会に参加し知識と技術を深めていた。中学時代でも友人稲岡徹君（後に北大でアブ研究に従事）と昆虫採集にいった。昆虫採集は中学でやめたが高校時代まで、毒瓶のかわりにフィルム缶を携えて山に行った。大学院進学後、東京の昆虫採集用品の老舗「志賀昆虫普及社」へ行ったときには感激したようだ。また岩田久仁男『日本昆虫記』は愛読書だった。少年時代の昆虫採集は多くの者に経験あるだろうが、岩田は、より専門的に熱意を持って知識や技術も習得し継続して行っていた。山登りを始める前は昆虫採集が最大の活動だったそうだが、それが山への関心を広げたかといえば、そうではなく、むしろ山では虫採りはやっていなかった。昆虫採集と山登りに関連のあることを岩田（1992）は述べているが、本人に関してはそうでもなかったようだ。ただ、後になってもセンチコガネとウスバシロチョウは好みであり採集に標本も作製している。形態の美しさゆえだと岩田はいう。後者は *Parnassius glacialis* という氷河にちなむ学名が記されていることもお気に入りだそうだ。

標本作製の技術を記した本が小学時代の愛読書で、地図に記されている須磨浦海岸へは父に連れられて市電と徒歩で出かけ、拾った貝や海草を標本にしていた。小学5～6年の頃には、神戸生物研究会の行事に参加して明石の北側の白川峠で第三紀の神戸層群（凝灰岩）の化石床で植物化石を採ったり、道ばたや工事現場の石を拾ってきて標本作りも行った。植物ではヒメジオンなど道ばたの草本や食草のウマノズクサなどを標本にし

た経験を持つ。こうした採集や標本作りの経験は、自然への関心と、収集・分類を通じた科学の基本的的方法論を知らず知らずのうちに身につけさせることであり（岩田，1992），それが氷河地形の基礎となるカタログ作りに結びついているのである。

岩田の父は、小5の時心筋梗塞で急逝されたが、開業医の父は「医学部でなく理学部に行け」というように思っていたそうである。研究者になりたかった父の夢を息子に託していたようで、さまざまな活動には父の働きかけも影響している。

地図には、船見物が描かれている。船への関心は幼稚園時代から強かった。工作の時に木とのこぎりや釘を渡されたとき、船室も作り立体的な造作にしつらえたが、釘をいっぱい打って作った別の園児の船の方が、園児の中では評判が高かったのに立腹していた。幼少の頃より現実の形へのこだわりが窺われる。

神戸には港とともに図にも示されている川崎造船所があり、新造時には船主に模型が送られ、それが各所に出回っていた。幼稚園の園長室には「橘丸」（1935～1973）という大島航路の模型があったそうだ。幼稚園時代に船の来歴を聞き、いまだにそれを覚えていることは船への関心の高さを示している。造船所の進水式に参加すると船の絵はがきをもらえたが、親が造船所の要職に就いている子どもの家へ遊びに行くときさらに多くの種類の絵はがきがあったそうだ。小学校時代には、船仕事に従事する家族の子どもが同級生にいた。その友だちを訪ねて近所の船溜まりへでかけ、船を飛び渡ると、ここは遊びの場でもあった。港には米軍艦の寄港時や日本丸寄港時にも親に連れて行ってもらっていた。義兄の友人のアメリカ留学出港見送りについて行き、氷川丸（1930～60年まで北太平洋航路で活躍し、現在は横浜で博物館船）船内を見学した。町内会での淡路島旅行は客船による船旅だったり、小5の海洋少年団行事で代表として神戸商船大学へ行き、手旗信号、オール漕ぎを練習した。オール漕ぎはうまくいかず嫌だったり、練習船深江丸でハンモックで寝たのを覚えている。

このように船にまつわる経験が豊かであり、父

の期待とは裏腹に一時は船乗りをめざして商船大に入学するのだと公言し、中学時代には大阪大学で造船を学ぼうと考えていたほど、船にぞっこんだった。港町神戸ならではともいえるが、神戸の少年の誰しもが船好きになるわけではない。だが、これが岩田の世界を広げていったことには大きく寄与しているであろう。

小3になると船体のラッカー塗装を始め、より本格的な船模型作りに励むようになった。小5の時（1956）には、南極観測船宗谷が南極へ向かった。日本が南極観測に沸いており、岩田も永田武の講演を聞いてきた父の話の聞いたり、朝日の記者による本『昭和基地—南極の日本観測隊』（朝日新聞社，1957）を読んでいた。夏休み課題には、南極観測に関する新聞記事を切り抜いてまとめ、当時の新聞に掲載された側面図をもとに、宗谷を300分の1のスケールでカステラの木箱を利用し、5枚重ねて船体を作りあげた。そして雪上車や装備もセットで作った。後に2000年頃、700分の1のヘリ母艦改装後の宗谷を作ったとき、飛行甲板の色がわからず、しらせがグレーだったので同じ塗色にした。後に、宗谷で南極観測に出かけた小疇尚氏（後述）に尋ねたところ緑色だったことが判明したそうだ。これもこだわりの継続を示すエピソードである。

その後もオスロで保存展示されているフラム号（前述の『フラム号漂流記』のノルウェーの探検船。後の図2に記されている岩田の尊敬する探検家・科学者で戦争捕虜生還にも尽力したフィリチヨフ・ナンセンが建造し、アムンセンの南極探検にも使用された）をみて、模型を作ったり、バルサキットのコンチキ号（『コンチキ号漂流記』で有名。南米からポリネシアへの渡来を実証するために建造された筏）を製作するなど、船模型作りは90年代まで続き、今もなお模型雑誌『モデルアート』誌を読み、模型も蒐集している。木製キットのエンデバー号（クック船長による南太平洋探検で使用された帆船）は結婚した頃妻が買ってくれたものがある。大卒初任給が6万円ほどの当時に5万円したそうで、これはまだ作らずにとってあり、「いつ作るの？」といわれているそうだ。岩田は、「船の木製の模型でミニ博物館を造るの

が夢です。さまざまな仕事の船をそろえたいのです。乞うご期待」という。船においても、身近で遊びの場ともなる存在から大型へさらに探検時代の大洋の船へと多様化かつ拡大の方向がうかがわれ、今なお継続している。希望と空想が連綿と続いているのだ。

このような船への興味があったから、後にパタゴニア探検や南極へも行くきっかけになったのかと思いきや、パタゴニアには飛行機で渡航しているので、探検への原動力としては船への関心は働いていないようだ。だが、帰途に船を利用した旅を行っており、それがその後の研究の展開にもつながっている。この話は後述するが、興味関心が自分の本業を広げていくことにも役立っていることを示している。

地図には、山陽本線の走る汽車を眺めたり、夜に神戸駅へ列車を見に父と行ったことが記されているが、岩田は鉄道への関心も強く、とくに模型が好きだった。Oゲージ（レール幅32mmの模型規格）の鉄道模型セットを父に買ってもらったことから始まり、やがてそれよりも小さいスケールのHOゲージ（レール幅16.5mm）モデルで、キット改造の蒸気機関車や自作の小型電気機関車・ディーゼル機関車に、自作した貨車を牽かせ、線路を組み合わせたレイアウトの上を引かせていた。実物のスケールモデルは長すぎて、十分にレールを敷いて走らせられるほど場所がとれないので、小型の軽便鉄道車両タイプにしていた。デフォルメされたものは好まず、また、客電車は窓抜きが面倒なので作らなかった。それでも鉄道施設などを含めて配置するとアンバランスなため固定したジオラマにはせず、広いレイアウト部屋を持つのが夢だった。鉄道模型は中学校までやっていたが、義兄の3つ下の甥に譲り今は現存していない。それを用いて甥は2m×1mほどの固定式レイアウトを作ったそうだ。岩田は鉄道写真には関心が向かなかったそうで、船模型にみられる形へのこだわりよりも、鉄道においては動く空間世界の構築とその構成美への関心が大きいようだった。

このような少年時代の趣味が、冒頭に記した岩田(1997)の指摘にあるように地理学的思考にどう寄与しているのか。趣味＝好きなことを発展さ

せていくのは、まさしく趣味ゆえにできることである。収集を増やしたり、技術を磨いたり、知識や情報を増したりすることは、ビギナーの段階から徐々に等身大に進めていけるものである。身近な範囲からより広く、そしてさらに上の世界を知り、そこを目指す。好きであるがゆえに、苦勞も時間の消費も、さらには出費も厭わない。こうした趣味が岩田のいう地理学的思考の修練に結びつくとしたら、ぎゃくに少年時代にこのような趣味を持った者には地理学を勧めることも可能であろう。また、子どもが趣味を続けていくことが将来に役立つとして親のアシストが大切となることを示すこともできよう。

鉄道模型のレイアウト（ジオラマ）への関心は、地図や地誌への関心に結びついていると岩田はいう。たしかに空間の構成やその要素の取舍選択においてそうしたセンスは地理学的思考と結びつくであろう。しかし、対象そのものよりも、それに至る過程での行動・場へのアクセス、モノを介した人や場所のさまざまなネットワーク、知識や技術の蓄積が後の研究にさまざまな形で役立っていることは想像に難くない。とくに、収集における未知へのあこがれ、想像の世界をふくらませることはこうした趣味の中に多く含まれている要素である。岩田の趣味でのこだわりは随所にみられるが、それが後の研究に役立ったというよりも、そのセンスが趣味にも現れていたとみておいたほうがよいであろう。このような趣味は、少年時代多かれ少なかれ関心をもつことであるが、それらをやっていたからといって岩田のような研究を行うことにはならないからである。そして、ここに記したような幼少時の記憶が今なお鮮明に思い起こされ、その関心は現在も持ち続けられていることは、原風景における主人公の「働き」の原型として理解できることであろう。さらに、ここで話題にしている原風景に注目しようと考えたのは、大学での懇親会時に、居合わせた方々と鉄道趣味の話題で盛り上がり、昆虫とともにそれも私と岩田との共通点であることがわかり、さらにそこから船好きだという岩田の趣味が分かってきたからである。このような展開になるのは人生と研究との一致によるところが大きい。

では、野外探検や地図への指向の芽はどうかだろうか？

図中に、母とエベレストの映画を観たと記されている聚楽館がある。これは、小2(1954)の時のイギリス隊のエベレスト初登頂のカラー記録映画「エベレスト征服」のことである。標高8000メートルのサウスコルに雪が積もっていなかったことや「サウスコルには死の匂いがする」という字幕スーパーを記憶している。映画館ロビーには登頂を想起させるテントや寝袋など登山装備が陳列されていた。後で思えば朝鮮戦争時の米軍の装備だというのが、メカ好きの岩田には魅力的なものだった。母が探検物語好きだったそうで、このような映画鑑賞の機会や冒険・探検物語も買い揃えてもらっていた。原田三夫著『少年少女探検物語』『南極探検記』を愛読し、逆にアーネスト・シャクルトンの漂流の話は怖くて読むのを止めたほどだったそうだ。わくわくとともに怖れも抱く、まさに冒険心が育成されたであろう。のちに高校時代に筑摩書房の世界ノンフィクション全集を読み漁り、山と探検ものに興味をもつようになった。とりわけ、『世界最悪の旅』『フラム号漂流記』がおもしろく、現在でも愛読書だそうだ。探検的思考・冒険心の源流はこうした時期に形成され、今まで一貫して継続している。

原風景地図には、小2の時に地図を作った範囲と記されている。これは、社会科授業で自分の歩いた経験をもとに、課題地図を作ったものである。大正時代に建てられた長屋が並び、共同便所や広場を抜けて曲がりくねった路地を、歩いたとおりに丹念に描いて提出したそうだが、すべての街路を直線で描いた生徒の方が褒められて悔しかったそうだ。小2でルートマップでなくサーベイマップ(しかも自らの経験・実測)で空間を二次元的にトレースできていたのは、なみなみならぬ地図センスといえよう。現実の地図は自分の方だと思ったそうで、ここに現実への関心とそれをトレースすることへの興味・実践がうかがわれる。さらに小5の時には、ジオラマ状で立体的な神戸都市域の地図を作ったといい、3次元化の指向も早い。

いっぽう、ふだんのソフトボール遊びばかりで

はつまらないので、山での遊びへと活動の関心や場所を広げた。その際には市街地図を使っていたが、奥の道まで記されたより詳しい地図を求めて、小6の12月に書店で地図コーナーを探して地形図を知ることになる。岩田は趣味の切手屋に行ったり、デパート(模型売り場)に行ったりするので三宮の繁華街にはしばしば行き、その行き帰りには歩くこともあり、元町商店街をよく歩いていた。その途中にある老舗の本屋(宝文館)では時々昆虫の本を探しに行っていた。そこは自宅からは歩いて30分くらいのところに位置していた。そこで2.5万分の1地形図神戸首部に出会った。1枚35円で購入し、次の日曜日に友人2人とともに、「谷をつめると泉になっている」という噂を聞き、「泉をみたい」とこの地図を使って、生田川を現在の新幹線新神戸駅あたりから源流へと辿っていった。そこで間違った支流を遡り、迷ってしまったが、ハイカーが助けてくれて、摩耶山まで同行してもらい無事に帰り着けたそうだ。これが山登りの魅力にとりつかれた契機となった。こうした何かのイベントに際して起こる偶然はこの後も岩田の来歴の中にしばしば出てくる。この「偶然」をどう理解するのか、これが人の思考形成において重要なことであろう。

2) 中学から高校時代

岩田は公立中学校を志望だったが、教師の薦めで私立六甲学院の説明会にも参加した。そこで岩田は山岳部の岩登りのPR映画にすっかり魅せられ、「ここに入学すればできる！」と中高一貫男子校の六甲学院に入学することとなった。

中学1(1959)年、山岳部に入部し、さっそくガード下で米軍放出品の3キロの羽毛寝袋を購入した。以来、中高生のうちに六甲のすべての谷、尾根を歩いた。この中高時代の行動範囲を示したメンタルマップが図2である。まさに山中心の生活から構築された世界観である。頭の中は山のことばかりだったことを見事に表している。自宅周りに歩いて行ける日常生活圏のすべての山と谷を踏破し、さらに、ハレの行動圏も山行とともに拡大し、空想・希望空間は海を越えて世界に広がっている。ただし、山そのものだけではない、尊

敬する人にちなむ地であったり、東南アジアが「悪疫の地でとても行けない」と「希望空間」にも不安が垣間見えるが、自分の内面においてとらえている自らの空間でもある。「行けない」は遠い存在ではなく、自分の身において考えるがゆえの裏返し这种感觉である。

2011年の秋に山岳部OBで六甲学院裏の天狗塚山(標高680m)に登ったが、なんて小さい山だと思ったそうだ。世界の果てまで制した岩田ならではの思いでもあろうが、岩田の山行による世界の拡大はここから始まったのである。

中2で鈴鹿山脈4~5日縦走(菰野から雨乞岳、御在所岳、鎌ヶ岳)、中3夏には石鎚山縦走を行い、中3夏休みから合宿とは別に泊まりがけ(山小屋やテント)で比良山や鈴鹿に山岳部の同学年の仲間たちと出かけていた。冬には、冬スキー合宿(福井の六呂師)で山スキーを覚えた。高1(1962年)からは日本アルプスを目指し、岩登りトレーニングや30kgの荷のポッカ訓練を行っていた。冬は、兵庫県氷の山、春は立山追分小屋、高2夏には、立山~槍ヶ岳縦走、冬には木曾駒、高3には部活から引退しても個人的に黒部の下の廊下へ行き、受験後には御岳登山をしていた。

高1のときは、北アルプス宇奈月から立山へと抜けた。樺平から上部軌道の木枠の小屋のような貨車に乗った際には通路に一升瓶を枕に寝転んでいる土方(作業員)を乗り越えるのが怖かったそうだ。

この時宿泊した立山の仙人小屋の小屋主と顧問が知り合いで、小屋主の所有する追分小屋がちょうど売りに出されだされたところで、顧問が60万円で購入することを決めた。六甲学院の小屋にしようとしたが、国立公園の役所が了承せず、厚生省から富山県に出向していた山岳部OB3期生宇野佐氏が骨折ってくれて実現したそうだ。それによって高2、高3と追分小屋合宿が実現した。

学校生活は山岳部中心で回っていた。六甲学院はイエズス会によって設立された学校で、軍隊方式のような規律で掃除など厳しい一方、山岳部が「いつ死んでもいい」という覚悟があるとされて、学校で評価されていたため、勉強をやらなくても許されていたと信じていたという。授業中には登

山記録や探検記など山関係の本を読みふけていた。毎週土曜日の放課後には勉強用具も制服もザックに詰めて13時半に学校を出て六甲山を歩いた。18時解散を基本としたが、遅くなると21時頃に帰宅することもあった。また、毎日の通学も最寄り駅から標高200mにある学校まで高度差150mを毎日20分で通い、継続トレーニングとなっていた。部員は6学年で30~40名同期は8名いた。中1~高1で4パーティーあり、高2がリーダーで各学年を引率し、毎週リーダー会議が行われていた。このとき、地形図を知った本屋の息子は山岳部高2の先輩で中1の学年リーダーとしてきてくれたそうだ。その後のパタゴニア探検の京大隊の安成哲三氏(現名古屋大学)が1つ後輩に、1学年先輩に井上治郎氏(91年遭難)がいた。後に顧問が55歳を過ぎて、顧問後継者に岩田を指名したものの、学校が英数担当を希望したため社会科教員では採用されず、岩田の教員就職は幻になったという逸話もある。

山行に関してはプランナー(2年の時は部長)として活動し、卒業前の部誌には「ヒマラヤに行こう」という檄文も書いていた。

各地への山行に際して用意していた地形図には山の東南斜面に流域ごとに灰、赤、ピンクなどで色分けして陰影をつけ立体的に見せて眺めていたそうだ。暇さえあれば山に陰影をつけて立体的にみせて眺めていたそうだ。現地と地図をみながら山の形はどうしてそれぞれ違うのだろうか?という形態認識は岩田の地形学への緒となった。そして、その地形を読み込み「ここなら行けそうだ」と、人の踏み入っていない未踏ルート・未踏地を探していた。『地図の空白部』(エリック・シプトン)が愛読書となった。希望・空想空間は、人にふれられていない大地へと向かったのだ。

当時の山行の様子を聞くと、山登りで焚き火は当たり前で、ラジウス(石油コンロ)は森林限界を越えてから、もしくは国立公園内で禁止されている時仕方なく使うものだったそうだ。冬はテントではなく雪洞による登山が当たり前だった。雪洞は後のパタゴニアで重要になるが、こうした経験の延長にあることがわかった。

このような山の話に及んだのは、岩田自宅での

聞き取りであった。大きな窓から見下ろせる谷、集落、近景の山並みと遠景の山並み、その先の稜線を眺めながら、そして、夕刻となり、薪ストーブに点火しながら、着火剤の便利さが話題となったことからである（写真2）。私は、カラハリ砂漠で岡本耕平氏（名古屋大学）と焚き火を囲んだ経験から「焚き火バー」構想に及んだ話をしたのだが、岩田にとっては焚き火はごく当たり前のものであったという話から過去から現在へ至る山の経験の話題へと展開したのだった。山中心の生活（思考）は今も日常生活の中に続いている。こうした日常生活の一端から研究の話につながっていくのは、先に述べたように研究と人生との一致があるからこそだといえる。

Ⅲ 大学入学から南極へ

1) 地理学への関心形成

岩田は、大学入学に際しては地理学を学ぶことを志望している。「子供の時から山には関心があった。高校時代には全生活が山を中心に回っていたので、大学受験も、山とのつながりが深そうな分野を選んだ」と記しているが（岩田, 1992）、山と地理学がどのようにつながったのだろうか？たとえば私は、地学を志望していたものの受験前にたまたま入試情報誌で「地理学」という言葉を見つけ、同じようなものだろうと地理学を選んでしまった。山中心の生活で、岩田はどのように進路を見つけられたのだろうか？

岩田は高校の時に「地理」「地学」が好きになったそうだ。中1の遠足で六甲山にのぼって、社会科担当の引率教師が説明してくれた。だが直前の授業で習った扇状地がみえるのに説明がない。地形の説明をなんでしないのだと不満を持った。後には三野与吉『地形入門』（古今書院1961）を読み、勉強したそうだ。さらに川喜田二郎著『鳥葬の国』『ネパール王国探検記』、梅棹忠夫著『モゴール族探検記』、本多勝一著『知られざるヒマラヤ』などを読んでいた。京大系研究者の探検記も読み、文化人類学も学びたいと思うようになった。高校時代には、地理への関心から地理学関連の書物も読み、村松繁樹・川喜田二郎著『人文地

理学入門』（ミネルヴァ書房1954）にも接していた。そこで、文化地理学・文化人類学者である岩田慶治氏も在職し、地理学と文化人類学がともに学べる大阪市立大学文学部地理学専攻を志望した。そのいっぽうで、山での仕事に就きたいという願望もあり、京都大学林学科も考えたが、数学が苦手ゆえに文系であったのであきらめたとのことである。

探検における社会への関心の萌芽は、中学生のときにもあった。中3の3月（1962年）に山岳部仲間とスキーをかついで鳥取兵庫の県境にある八頭郡智頭町芦津、東山（とうせん）・沖の山（おきのせん）へ行ったときの思い出に遡る。鉄道とバスを乗り継いで終点で降りて農協事務所に泊めてもらえるところを紹介してもらった。民家で味噌汁の中身は切り干しダイコンのみ。お客さんが来たからと缶詰1個がだされた。翌日は林業作業場へ行き山小屋に3泊、同じ食事。紅茶を出したらこんなもの飲んだことがないといわれた。夕方民家に滞在していたところ、スキーを履いた狩人が鉄砲を担いでウサギをぶらさげて山を下りてきて、獲物のウサギを川で解体し、今日のおかずにするのだという完全な山村生活は、当時の町で暮らす岩田には大きなカルチャー・ショックを与えた。山中心といいながらも地学的な「山」そのものではなく、「山の生活世界」への関心が引き出されている。山行で用いた地形図で岩田は集落（赤）・田（黄）・畑（緑）など色分けした土地利用図も作っていた。福井県山地の作り地域や山間部の小集落や田畑の分布が美しい小宇宙に映った。このような山間辺境空間の全体像を理解し記述したいとする思いが後のネパール調査や地誌学形成へとつながった。人の営みも形とその構成としてとらえようとする岩田の視点の原点がここにある。

あえなく浪人生となった岩田だが、大阪 YMCA 予備校では、『鳥葬の国』に登場し、当時大阪市大地理学教室の助手を勤めていた文化人類学・ネパール・チベット文化研究者の高山龍三氏（元京都文教大学）が講師だった。文化地理学にも詳しい高山氏に相談したところ、岡山大学か広島大学の地理学を勧められた。しかし、山岳部の先輩が

京大林学部に在籍しており、そちらを受験した。だが失敗し、立命館大学と明治大学文学部地理学専攻に合格した。二期校受験では、船乗り願望も捨てがたく鹿児島大水産学部に願書を出したものの受験しなかった。これが後の岩田の研究の分岐点となった。

明治大学の地理学教室には、地形学の小疇尚氏が在職していた。小疇氏の奥様が義理の兄の親類であることがわかり、親戚の家へ行って小疇氏に相談して、政経学部には文化人類学もあった明大文学部地理学専攻に決めた。そのため、大学入学後は、山好きと知られ、2年次には小疇氏の調査助手として大雪山を2週間縦走し、簡易写真測量なども行った。

2) 学生生活

明治大学1年生(1966)となった後の岩田の足跡をたどってみよう(表2)。

岩田は山岳部に入ったものの1年のうちに退部した。当時の暴力的体質、授業に出ないのが当たり前なのに嫌気がさしたそうだ。その際に予備校から東京工業大学に移っていた高山龍三氏に連絡し、相談にいった。その場には、川喜田二郎氏もいて「やめてしまえ。しごきが体力をつくるのではない」と言われたそうだ。川喜田氏とはこの後やりとりはないが、パタゴニア探検以来盟友となる藤井理行氏が東工大学生時代に川喜田氏に心酔し、その後移動大学で事務局長を務めたそうだ。

いっぽう、『鳥葬の国』のような探検にもあこ

がれて、文化人類学を学ぶために教養の授業では岡正雄氏やアラスカを調査した祖父江孝男氏の文化人類学を受講した。授業初回時に祖父江氏に文化人類学を勉強するにはどうしたらよいか教壇で直接尋ねたところ、日本民族学会への入会を勧められ、即入会した。さらに祖父江氏の薦めで学生サークルの社会学研究会に顔を出した。そこには、岡正雄氏の子息千曲氏(当時明大学部生)が先輩として会を牽いており、ラドクリフ・ブラウンなど文化人類学者の親族組織理論の読書会が催されていた。岩田は、「エスノグラフィーに関心がある」と自己紹介したところ、ふんと笑った女性がいたそうだ。それが佐伯温子氏—後に岩田の奥様となる女性だが—、理論的なことに傾倒していたからだった。社会学研究会では東北地方の農村調査も企画されていたが、農村社会学的な調査への関心は高まらず参加しなかった。

1年の夏休み前に、岩田は温子氏から、食堂前でたまたま会った折りに、その調査に行くための寝袋について相談された。それがきっかけで仲良くなり、冬には奥多摩へ二人でいく仲となった。

民族学会では、5月の箱根大会や、秋の名古屋大会に参加した。名古屋では、岡正雄先生の周りに、川喜田二郎、岩田慶治、中根千枝氏ら大先生が集まり、そこに岡千曲氏と温子氏がいたので同席もした。学生時代にこうした場にいるほど、学問の吸収に熱意をもっていた。日本民族学会は、大学院で本格的に地形学を始めたので退会した。さらに文化人類学では、泉靖一氏の夜間の講義を

表2 岩田の履歴：大学から第1回南極調査まで

年	事項	世の中の出来事
1966	明治大学文学部地理学専攻入学	ベトナム戦争(1960~1975)
1968	パタゴニア・南米・ヒマラヤ探検(11月~翌年7月)	三億円事件(1968)
1969	立山研究会参加	安田講堂事件(1969)
1970	卒業論文制作	エベレスト日本人初登頂(1970)
1971	東京都立大学理学研究科地理学専攻入学	大阪万博開催(1970)
1972	修士論文制作	浅間山荘事件(1972)
1973	東京都立大学理学研究科地理学専攻博士後期課程進学 結婚	沖縄返還(1972) 札幌冬期オリンピック開催(1972)
1974	第1回ヒマラヤ調査(7月~翌2月)	第一次オイルショック(1973)
1978	東京都立大学助手	エベレスト日本人女性初登頂(1975)
1984	第1回南極調査(第26次隊)(11月~翌年4月)	沖縄海洋博覧会(1975)

2年生から、夜間のゼミには3年生から受講した。こうしてみると、山登りだけでなく文化人類学をはじめとする学問の修得意欲も相当高かった学生だと見受けられる。

だが、高校時代から地理学の書物も読みあさっていた岩田は、地理学の勉強はどうしていたのだろうか？専攻課程に所属していたので、焦らなくてもじっくり教育を受けられると考えていた。学生団体の地理学研究会にも参加し、諏訪の工場調査を経験している。ただし、工場調査に行く時でも前述の大雪山調査の後、富山から立山縦走を経由して諏訪に向かっており、山中心の生活でもあったようだ。当時在職されていた江波戸昭氏の授業では、環境決定論を巡り議論したり、神田の餃子屋で食べた後、渋谷のバーで一晩歌ったり、アートシアターで出会ったりしていたそうだ。ただし、岩田は、統計や役場資料で研究するだけでは中途半端な人間理解や空間理解でしかないと感じ、そのような人文地理学や経済地理学は好きになれなかったという。辺境を自ら訪ね歩いた岩田には、それで現地を理解するにいたらないものに思えたのだ。だから、長期間にわたって住み込み調査や参与観察を重視する文化人類学に関心をもったのだ。高校時代の土地利用図作りやこうした経験は「山間辺境空間の空間的理解としての地誌」の発想へとつながっていく。

3) パタゴニア・南米・ヒマラヤ探検へ

大学2年の時に、母校六甲学院山岳部OBでパタゴニア探検が企画された。当時神戸大学にパタゴニア・アレナレス峰を初登頂された副隊長の高木政孝氏（『パタゴニア探検記』岩波書店1968、その後太平洋民族調査で行方不明）がおり、六甲学院で講演会が行われ、顧問がパタゴニアに親近感を持っていた。当時の山岳部では、登攀派と未踏派に分かれていたという。後者の岩田は大学生になってからヒマラヤの登山記録や地図を集めていたが、当時ヒマラヤは登山禁止だった。ペルーやボリビアの険しい山には手が出なかったので、パタゴニアに注目されたのだった。北海道大学隊が1964～65年に行っていたが、まだ未踏地があるように思われていた。行く先決定とメンバー決

定とは並行して進み、高校時代に「ヒマラヤに行こう」と檄を飛ばしていた岩田は自ずとメンバーとなった。

東京にいた岩田は、日本山岳会の図書室へ出向き、アメリカン・アルパインジャーナル、ニュージーランド・アルパインジャーナルなど各国の山岳誌を渉猟し、パタゴニアの未踏ルートを探りだした。先行文献収集・整理により登山情報ノートを作ることは、少年時代の収集分類経験が役立ち、情報ファイリングにより未知・未踏部を探し出すことは研究法を身につける上で最も有効だったという。

また、京都大学も探検隊を計画していることが、六甲隊員の一名が京大山岳部員だったことからわかり、しかも六甲山岳部で1年先輩の井上治郎氏（元京都大学、1991年梅里雪山で遭難）、後輩の安成哲三氏（現名古屋大学）が加わっていることもわかった。

そして、東京工業大学でもワングル部がパタゴニア行きを計画していることを知った。その情報は社会学研究会で知り合って仲良くなった佐伯温子氏からもたらされたのだった。佐伯氏の母校の女子高の山岳部コーチが東工大ワングル部員だった縁である。そこで岩田は東工大ワングル部に手紙を出し、応対してくれることになったのが、後に盟友となる藤井理行氏（前国立極地研究所所長）であった。東工大、大岡山の時計台で待ち合わせ情報交換をした。その後、藤井氏の50ccバイクの後ろに乗せられ雪谷にある氏の自宅部屋で語り合ったそうだ。

こうして準備を進め、1968年11月に岩田は日本を発つ。荷物は六甲学院OBで川崎汽船に重要なポストの人がいたので荷物運搬を依頼し、船長託送扱いでモーターボートや食料品を送ってもらったのでスムーズにいった。東工大隊は通関に35日要しており、後の計画にも支障が出た（成瀬ほか、2011）ので、遠征にとってこうした采配ができたことは重要なことであった。

出発時には、佐伯温子氏も見送りに出ており、涙を流しながらの見送り姿がまわりに見られて、二人が公然の仲と認められたそうである。

パタゴニアでの探検行については、成瀬ほか

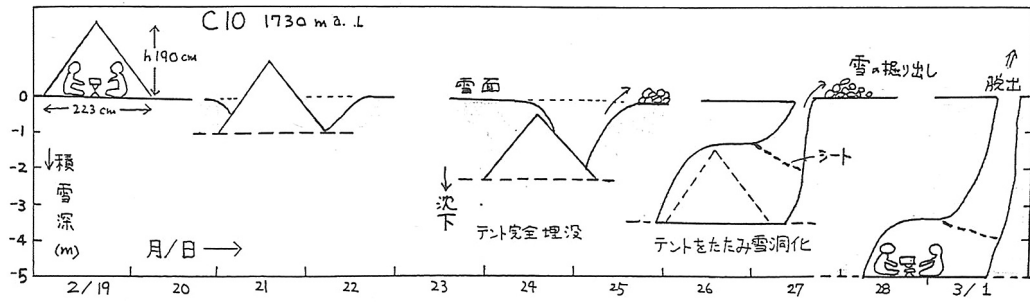


図3 ウプサラ氷河での雪洞生活 (岩田作製) (成瀬ほか 2011 より転載)。

(2011)に「南氷原を横断してウプサラ氷河へ」と題して岩田が詳しく述べている¹⁾。ここで私がびっくりしたのは、氷原横断中に遭遇した激しい積雪で10日にわたって、行路が阻まれ、5mの積雪に次第に埋もり、雪洞生活となったことであった。この模様は図とともに記されているが(図3)、図だけを見るとのんびりくつろいでいるようにも見える。この間どう過ごしていたのかが気になった。雪洞を作るというのは、前述のように当時の山行では当たり前のことであった。5人メンバーで、四隅に座り、食事以外は眠っていたそうだ。小便は手持ちの袋に入れて流し、大便は膝と背中を使って縦穴を登り、外ですませたのだが、これがびしょ濡れになるのでたいへんつらかったとのことである。こうした泰然としたふるまいが何日も継続できたのは、やはり山行が日常生活になっていたからこそのものであろう(写真3)。

そんな経験もしながら、氷河の性状に関心をもち、トビムシの生息分布にも注目し、そしてクレバスを踏み抜きながらも氷河の源頭から末端近くまで30日以上歩き抜き、その移り変わりに大きな興味を持ち、「あと1日でも長くいたい」までに至ったのだ。

当時は大学紛争さなかであった。安田講堂事件(1969年1月18～19日)はサンチャゴに戻ってきて知ったそうだ。それよりも、温子氏からの便りが届いていないことのショックの方が大きかったようだ。やはりフラれてしまっていたのだった。岩田はそのおかげで後の卒論修論に没頭できたという。これが冒頭で記したナルシスへ一人で通

っていたことの一因でもあろう。それでもサンチャゴ帰着後、京大隊の井上民二氏(1997年サラワクで飛行機事故死)とセロプロモ登山を行っている。さらに、プエノスアイレスへ移動してアルゼンチン国内で、アタカマ高地をチリ国境まで鉄道で旅し、ネヴァドチカ、セロソコンバ登山をしたり、パンバにある農業町ペアポに暮らすイタリア移民の一家に招待されて出向いたり、リオデジャネイロに滞在した後に、アフリカ、ダカールへと飛んだ。そしてダカール～ボンベイ間を喜望峰まわりの船旅にしている(写真4)。マルセイユと横浜を結ぶフランス郵船(通称MMライン)に六甲隊メンバーの前川弘幸氏と2名で乗船した。彼は後に川崎汽船に入社し会長までになった人物である。12,000トンの貨客船の、1室6人2段ベッドのエコノミー船室では、ナイル川を下ってきた早稲田大学の探検部員や青山学院大学のOG、富山の菓子屋の若旦那など日本人客がいて、20日間の楽しい船旅だったと述懐する。そしてカトマンズへ行き、1週間のヒマラヤ・トレッキングを行った。登山は禁止されていたが、山麓トレッキングは許されていた。しかし、ここでの飲み水が原因で帰国後A型肝炎を発症し、やむなく飛行機でカルクッタから帰国した。そして数ヶ月間闘病生活を送る羽目となった。パタゴニアでの探検のみに終わるのではなく、希望空間の世界に出た岩田は、南米からさらに大洋を旅し、ヒマラヤでエベレスト登頂はできなかったにせよ、その端緒を作ってきたのだった(図4)。



図4 1968～69年の岩田の旅程.

4) 立山研究会への参加

1969年10月、岩田は立山で開催された科学研究所費特定研究「気候変化の水収支に及ぼす影響」の研究会に参加した。これは、風邪をひいて出席できなくなった小疇氏の代理ということであったが、パタゴニアでの実地経験が買われてのことでもあった。ちょうど肝炎が治り動けるようになって時間もあったタイミングだった。この研究会には後にヒマラヤ・雪氷研究を主導する樋口敬二氏(当時名古屋大学)も参加しており、先に知り合った藤井氏が名古屋大学大学院生へ進学が決まっておりに参加していた。ここで二人は再会することとなった。そして、氷河の経験を発表したのだった。

そして、この研究会の帰途、同じく参加していた東京都立大学(現首都大学東京)助手の地形学を専門とする野上道男氏(東京都立大学名誉教授)と富山地方鉄道電車内で、富山まで立ちっぱなしながら話をする機会もあった。そこで、氷河地形をやりたいなら俺のところへ来いとの言を受けた。その後、M1のときには1ヶ月間2人で北海道をヒッチハイクで調査したり、M2のときには修論調査の監督・指導にフィールドとした根釧原野まで来てくれた恩人で大きな影響を受けたと岩田は述懐する。

学生でありながらこうした最先端の研究の場に

出て議論に加われたことは岩田にとって将来の展開につながる大きなイベントであった。また後につながる新しいネットワークができたのだった。

大学では、都立大の貝塚爽平氏の集中講義も受けて薫陶を受け、都立大大学院への進学をめざすこととなる(岩田, 2011 a)。

5) 卒業論文

1年留年し5年生となった岩田は、1970年に卒業論文作成に取りかかった。69年にパタゴニア探検を終えて帰国した岩田は、大学ゼミでそれを報告する機会をもったが、卒業論文には結びつかなかった。指導教授は変動地形学の岡山俊雄氏で、当時の地理学専攻生は1学年60人でゼミには20人ほどが参加していたそうだが、大学紛争のあおりを受けて授業には岩田一人が出席しただけだった。そこでテーマ決めを相談する時間がとれ、「自分の一番好きところで書きなさい」といわれて日本アルプスで多雪地形をテーマに卒業論文を書くこととなった。小疇氏は講師であったため卒業論文を担当しておらず、家に呼ばれて、氷河と周氷河に関する研究の文献カードを写させてもらった。この成果は、「白馬岳北部、長池周辺での残雪の作用」として1971年3月に提出された²⁾。

いっぽう岩田は、前述の読書の影響もあって、学部時代には村落調査で村の全体像を描くことに

関心を寄せていた。パタゴニアへ行く前は山村の生活誌を描きたかったそうだ。地理学研究会での諏訪の工場調査ではできなかったより奥地の山村を対象とする希望ももっていた。

パタゴニア探検時でも、現地の先住民アラカルフ族を調べようと画策した。泉氏に相談したところ、有名な報告書がスミソニアンシリーズにあるからと紹介された。現地でもチリ空軍基地に泊まっているとき、アラカルフ族はその隣に住んでいた。しかし、すでに配給食料を食べていた。また、クリスマス時にはいっしょに飲み食いダンスしていた。すでに彼らは、「空想・希望空間」にいなかったのだ。調査のための住民とのコンタクト方法もわからず、民族調査は断念したそうだ。だが、こうした思いは「地誌」についても強い関心を寄せている（岩田、2000）ように、今なお続いている。

6) 大学院へ

東京都立大学の入試面接で「君は山に登りたいから大学院に来るのかね。勉強するためにくるのかね」と聞かれて、「もちろん勉強するためです」と答えた（岩田、1992）岩田は、合格後、平野の地形で修士論文を書くことにし、根釧原野をフィールドとした。

ここにはどんな変化があったのだろうか？岩田によれば、貝塚氏より平野研究が指示されて、日本の平野で一番山的なところとして選んだそうだ。貝塚氏はそれまで地形図による根釧原野に関する仕事をしていたので、現地調査に理解があった。ここで岩田は、周水河地形の典型である谷の形の非対称性を発見した。また、根釧原野に以前から関心を持っていたことも大きい。川喜田二郎著『日本探検記』や本多勝一著『北海道探検記』をすでに読んだり、大1の時にすでに根釧原野を歩いた経験があった。その当時はまだそこに原野生活が残っていた。分教場があり、校庭でシートを敷いて寝ていたら馬に蹴飛ばされそうになったりした。修論時には変貌が大きく、分教場がなくなっていたそうだ。こうして根釧原野の地形発達史研究を進め、冒頭の「ナルシスの一夜」を経て修士論文「根釧原野の非対称谷と周水河現象およ

びそれらから推定される洪積世末の自然環境」を1973年3月に提出した³⁾。

7) 白馬から新宿へ、そしてヒマラヤへ

1973年4月、山岳部時代の友人の情報で、温子氏が岩田に連絡を取りたがっていることを知った。岩田はさっそく連絡し再会した。「パタゴニアに行く前は観念的だったけど、実際が伴うようになったわね」と言われて仲が復活した。もっとも温子氏の父は「一度フツた男とよりをもどすとはなんてことだ」といわれたそうである。この「観念的」という言葉はこれまでの岩田の実証的研究に重ねようとしてもピンとこない。岩田によれば義兄の影響が大きいという。ただ、岩田は行動的であると同時に多くの書物も渉猟している。こうした知識も会話の中では多くでたのであろう。また原風景地図に幼少の頃より「空想・希望空間」にみられたように、多くの希望や空想事も語ったかもしれない。やがてパタゴニアを現実のものとし、卒論・修論と研究の構想を実証していく過程を経て、空想から現実へと着実に地に足を付けて歩み出していたのであろう。

岩田は温子氏と再会2度目のデートを彼の誕生日4月18日と約束するまでにこぎつけた。その前、4月10日から16日までの予定で白馬調査へ出かけていた。ところが下山予定日にガスのため下山できず、頂上に戻って雪洞を掘ってビパークした。翌日は雨となり動けず。18日は、良い天気になったので、何とか間に合わせようと母池に回って稜線を走って降りたそうだ。「鉢ヶ岳の南のコル（雪洞）6時発～三国境～小蓮華岳～白馬大池～自然園（当時はなし）～母池高原～（バスなし）～白馬大池駅。駅へのジグザグ道を集落の中をショートカットして11時過ぎに到着し、アルプス6号に白馬大池で乗った。」と記録されている。さらに「車窓からは、安曇野には鯉のぼりがたなびき、サクラが満開で、後立山連峰が見渡せ、すべてが自分の誕生日を祝福してくれているようだった」と鮮明に記憶されている。山行調査の疲れも将来の希望の前に吹き飛んでいたであろうとノロケ的に想像することもできるが、岩田にとってはこの機会がこれまでの度重なる偶然と

もいえる機会のように人生の針路を決めていく上で重要なものにとらえられていたのであろう。それは30余年過ぎた今日でも風も色も景色も鮮やかに蘇るほどの瞬間だったのだ。

そして18時10分新宿に到着し待ち合わせに間に合った。その後6月にはプロポーズし、翌春の結婚を予定していたそうだが、温子氏の希望で予定を早め、11月末に婚姻届を提出した。12月、結婚披露パーティーの後、友人10人ほどが新居のワンルームマンションに押しかけてきた。その一人が藤井氏だった。そして、その場で、岩田は藤井氏よりヒマラヤ調査を打診された。こうした瞬間の巡り合わせは偶然でもあり必然でもあることが研究アイデアや立ち上げのときにはしばしば起こる。これまでの岩田の研究の進展にみられるさまざまなタイミングもまさにここにあるといっってよい。もちろんそうでなくても正式な打診もあったであろう。しかし、こうした雰囲気の中で場の盛り上がりから生まれることは、そこに何かしらの連帯感や協働関係を構築する共鳴・共感部分があるからであろう。それがその後のテーマ設定や関係構築に重要な働きをするのだ。都立大院生時代には、寒冷地形談話会や比較氷河研究会の世話役や事務局を引き受け、テーマや目標を同じくする仲間を組織し、関係する研究者を講師に招いて研究会を開催するなど研究分野を開拓すべく主体的に動いていた。

年が明けて74年1月初めには、三重県鳥羽で打ち合わせ研究会があり、2月からの調査を打診されたが、新婚早々ゆえ、7月～12月に延期してもらったそうだ。

指導教官の貝塚氏は、当初はヒマラヤ行きに難色を示していた。しかし、ヒマラヤ調査を指揮する樋口氏より名古屋大学に集中講義で招かれ、雪氷学でも地形学を重視しその基礎を学ぼうとする態度に接し、貝塚氏の態度が変わり「ヒマラヤに行ってもいいよ」となったそうだ。こうして、かねてからの念願のヒマラヤへ堂々と行けることとなった。

一方、温子氏は当時、フランスの貿易会社勤務だったが、会社を辞めて、イギリスに留学した。会社時代にテレックスを自由に使えたのでそれで

ケンブリッジに学校を探し、自ら計画を立てて行ったそうだ。このとき温子氏が鉄道(時刻表)オタク、旅行オタクだと知ったそうだ。温子氏によりイギリスから、「フラム号」の本やスコットの日記の復刻版が岩田のもとに送られた。ここでも船・南極・探検が合わさっている。帰途は、カトマンズで待ち合わせて共に帰国する予定だったが(写真5)、岩田が調査の都合で2月まで延長になったため実現しなかった。のちに温子氏は旅行企画を立てたりツアーを率いたりするようになり、中国黄土高原には岩田も同行し2000年以降すでに数千キロを旅している。

以来、ヒマラヤでの氷河研究が続いていく。このプロジェクトの最初は名大・北大・京大の院生諸氏が東北自動車道の積雪調査で稼いだ300万円を投じた自費調査だった。そこで雪氷学研究室を率いる当時50代なかばの樋口氏が科研を申請して、以後は科研調査として継続されていった。このプロジェクトでは、地形、雪氷、気象学者のみの全員自然系で構成されていたが、氷河研究だけではなく、地域のすべてを知りたいと考えられていた。3年半のステーション維持もあり、小規模発電、農業開発なども立案されていた。村自治組織(パンチャヤット)のメンバーに加わって村人から順番に薪買いなど行っていた。当時の研究の気概がうかがわれる(写真6)。

岩田は、74年度年7ヶ月、76年度4ヶ月、78年度に2ヶ月参加した。そして、80年度からは中央ネパールへ場所換えし、80～82年度はヒマラヤ隆起研究で、80年度4ヶ月、82年度はカトマンズで調整役となり、一人でポーターを一人雇ってネパール中部を歩き回った。94年度は1ヶ月、95年度には2ヶ月滞在した。こうして岩田は、氷河流動測量、氷河末端測量、モレーン分布と時代推定、気象観測などの研究調査を進めた。

8) 南極へ

南極へは、1984年度に第26次日本南極地域観測隊の夏隊員として参加する。南極へのあこがれは、前述のとおり小学生のときからあった。1971年M1のとき地理学評論誌で南極隊員募集記事を見たときには応募を検討したが、このときは時期

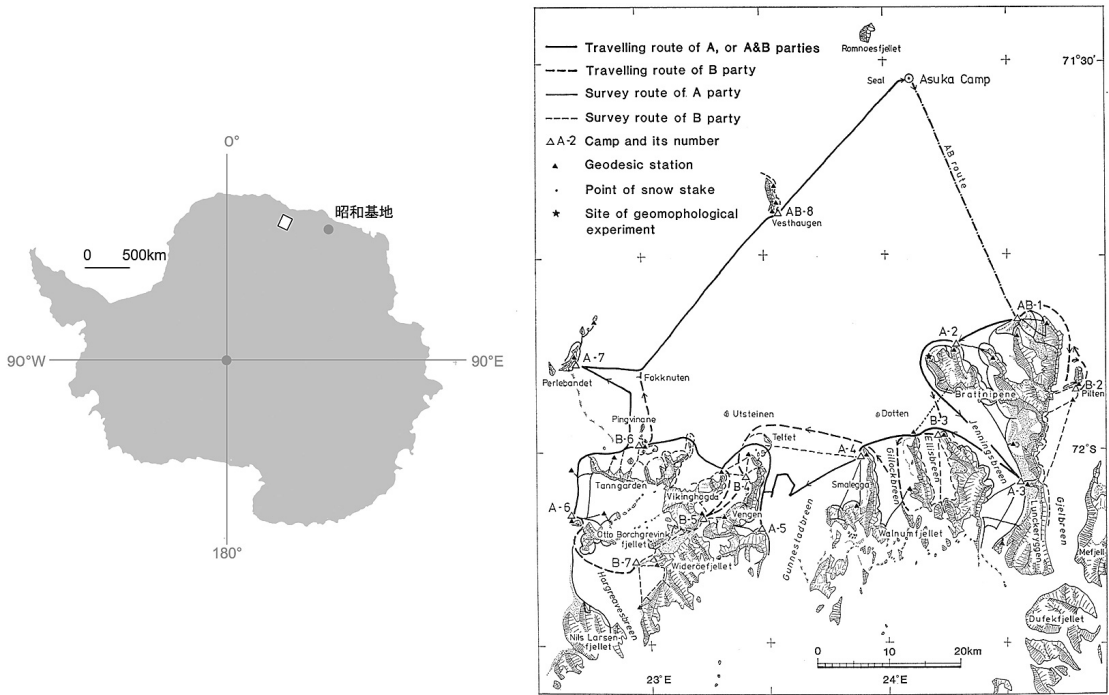


図5 セールロンダーネ山地調査第26次隊のルート。
行程図は森脇ほか(1985)より転載。

尚早と実現しなかった。その後ヒマラヤ行きを決定した1週間後に国立極地研究所から岩田に越冬隊参加へ打診されたが、貝塚先生より、ヒマラヤの方が先に決定したのでそちらにしないとのアドバイスを受けて見送りとなった。

そうした三度目の正直の84年度調査の目的は、昭和基地の西方約600kmにあるセールロンダーネ山地の地学・地形調査と地形図作りであった。1983年度に予備調査、84年度から本調査が始まり、90年度まで続いた。「人にふれられていない大地」未踏の地と「地図の空白地」への希望が叶ったのだ(図5)(写真7)。90年度には2度目の参加で、リーダーとなった。12月中旬から2月下旬にかけて、昭和基地には滞在せず、プレハブ小屋とテントで暮らし現地調査を行っていた。子どもの頃は偏食が多く学生時代には探検家になるためにそれを直そうとした岩田であった(早稲田塾ホームページ)が、南極食も楽しんで(写真8)。ここでは、5万分の1地形図を21図幅作った。ただし地名に関しては、岩田は3つ命名し

たが、思い入れが苦手な良い名称が浮かばず、無垢の自然を人が汚す気がするの好きでないものである。そこに人との生活との関わりが出てくれば、はじめて地名をつける意味が出てくると考えている。

2度目の調査では2月15日に帰還予定だったが、天候不順のため2週間迎えが来なかった。予備食を食べ、海岸に残された食料ゴミを拾って食べていた。やがて「しらせ」が沖合に見えた。しかし、17時を回ったのでヘリコプタを飛ばすのをやめるという連絡が届いた。これには調査隊の若者が抗議したので、リーダーの岩田はヘリをよこすよう依頼した。21時まで会議の末、迎えのヘリが来た。岩田と白石和行氏(現国立極地研究所所長)のみは翌日回しになったが、2人で「明日ヘリが来なければいいな」と願ったそうだ。なぜですかとの私の問いかけに「いること自体が楽しみだから」と岩田はあっさり答えた。これは、パタゴニア氷河での最後の心持ちと同じである。これもまさしく研究と人生との一致ゆえの答えである。

IV 地理学的思考の原点を探る

岩田が問題提起した地理学的思考の形成・修練の場は、岩田自身においては確かに少年時代までさかのぼる。昆虫採集や模型作り、登山などの活動にあったとみてとれる。これはⅡ章で論じたように、生物採集や模型収集は、モノへの関心の広がりにおいて地理学的思考と結びつく。資料の整理、分類は、グループ化や秩序化の発想や練習となる。知識や技術を習得するにつれて、さらに未知なるものへ関心が拡大すれば、活動範囲も拡大し、新たな場所への興味を生み出す機会をも増やす。また、岩田の原風景地図に示されていたように、「空想・希望空間」を持っていることは、未知へのあこがれ、それを解明する気持ちと向かう力を表している。「行きたい」希望は実現に向けて動いていくのである。それがさらに広がり、大きな世界へ向かう。

中高生時代の登山活動においては、山一つ一つが単なる登山対象として点的に存在するのではなく、原風景地図における、面的、空間的な階層的の広がりとしてとらえられていることに注目できる。これは、「行きたい」から「行くぞ」という岩田の意志を持った世界観の広がりを示し、徐々に現実のものとしている。あわせて、登山活動においては、生活の全体像や人間をとらえる視点・経験も有している。山行の経験は、体・心で実体として感じることもなっていることに注目できる。自然の一部でなく、世界観をとらえて描くことは地質学的・地球物理学的な山ではなく、総合的なそして形態的な地理学への「必然」的流れとしてとらえられる。それは、人と自然の営み・歴史が織りなす「大地」として見る視点であろう。これは岩田が現在関わる「ジオ・パーク」の「ジオ」を「大地」ととらえる認識につながっている。

岩田の地形学は地形として固定されたものとしてとらえるのではなく、結果や、メカニズムやプロセスだけではなく、そのものの形態・性状・変化・成り立ちを明らかにする。これは地形学の一つの方向として認められる。このような形の動く様を「生き生き」と記述し理解しようとする思考は、姿形・温度・触感などの感覚を伴って感性で

とらえる「生き物的な感覚」といえるものである(野中, 2009)。この思考について岩田に尋ねたところ、「氷河生物を対象にしようとは思わなかった。昆虫を学問の対象にしたことはない。センチコガネとウスバシロチョウにこだわったのは、その美術品・工芸品的すばらしさに惹かれたから。」だという。まさにそのとらえ方である。「生き物」的思考は対象として生物をとらえることではなく、そのセンス、生きることへの思いの投影であり、「わくわく」する気持ちなのである。これこそ岩田の趣味から共通して見いだされる思考の原点であろう。

岩田の少年時代から高校時代にかけては、趣味や山生活が、どれか一つというわけではなく、並列・複合しており、いろいろな場面でもに行われることに注目できる。岩田のまわりの生活環境は地理学的にも環境要素的にも身近なところから遠方へ、比較的容易でアクセスしやすいものからより高度なものへと連続的に広がっており、また、さまざまな機会が得られてきたこともあわせて「恵まれている」、そして多くの人間関係も「運がいい」ということになるかもしれない。「見えない赤い糸」のつながりかもしれない。しかし、そのような場が設定されても誰しもが、岩田のような地理学者になつたり、なれるものではない。岩田の地理学的活動は大学入学後にさまざまに展開していったのはⅢ章に述べたとおりである。その諸イベントとその契機やそれにまつわる人間関係をチャート図に表してみた(図6)。岩田の生活世界・場において、岩田は自ら活動し、多くの人たちに会い、そこでできた関係が後のさまざまなイベントを進めていくときの人材となつてつながっていくことがわかる。Ⅲ章で述べてきたように待つものではなく、能動的に自ら出かけて知己を得ているのである。自ら動くことにより、自分にとっては外の動きの中に入り込み、自らその動きに組み込まれていっている。そして後にそれらが束となって大きくなっている。それは自分の(相対的な)小さな意志決定の積み重ねの結果である。それがつながるとき、大きな流れに乗る。そして、それらの個々の要素は、人を介して得られるものである。したがって人のネットワークと

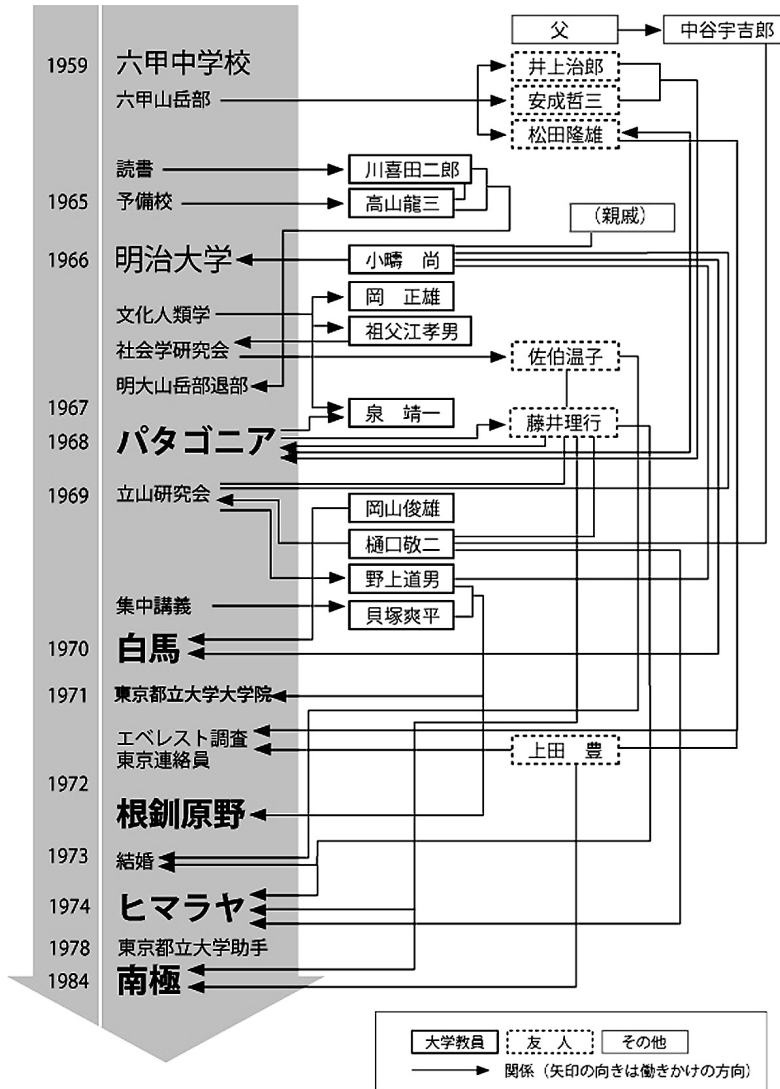


図6 岩田の研究に影響を与えたイベントと人的ネットワーク（本稿に関わる部分）。

して展開し、人同士が結びついてより大きな活動へと展開する。ここでは相手と自分との共感が大切な要素であろう⁴⁾。

共通する趣味の話題が人間関係にも、とくに先生との関係を良くしてくれたことを指摘する。たとえば、大学院時代の貝塚氏とは絵画、戸谷氏とは昆虫などの物へのこだわり、岡山氏とは切手などを述懐する。また、父が中谷宇吉郎が好きで(旧制高校で同窓)、『雪』や随筆を読まされ、それを中谷の直弟子である樋口氏に話し、心証をよ

くしたかも知れないともいう。これらも感性に発する共感となっているエピソードであろう。

表面的には運や「見えない赤い糸」として映るかもしれない。しかし運や関係は、自分で引っ張ってくるもの、ひっかかるための能動的な働きかけ(意識してなくても出しておくこと)が大切であることが岩田の人生からわかる。岩田は、昔は小便をするたびにヒマラヤに行くぞという呪文を唱えて願掛けしたそうだ。こうした内なる思いは、働きかけという意志から具体的な動きとな

り、その姿勢は共感へとつながる。運は、偶然や一瞬であっても、それがプラスの方に動いていくための「何か」と思われがちであるが、それは分からないものではなく、岩田にとっては「行ってみたい・みてみたい」と思ったら止められない、できない方へ向くのではなく、「やってみたい」、そしてそれ何とかして実現しようとする「向き」と「勢い」をもった力である。すなわち、意志の力＝主体性があるがゆえにひっかかる＝主体的行為となるのである。冒頭に記したナルシスの一夜は、自分のやってみたいことを認めた、すなわち、主体性を自ら確認できた瞬間だったのである。

こうした主体性と主体的行為は、じつは少年時代からさまざまな関心の中で貫いてきていることが、回顧を整理することからわかる。「動いていく」ことが、つねに自ら成長している証であり、それが新たなネットワークや蓄積を作りさらに大きくなっていく、まさに自らの「血肉」となっているのである。自分を生きることが世界に生きることとなり、発想、実践、そして蓄積になる。ここに一人の人生と研究との一致がある。岩田のいう「やりたいことをやる人生の幸せ」とはまさにこうしたことである。だからこそライフ・ヒストリーから学べるものがあるのだ。小泉(1986)は、発想の方法論として連想トレーニングをあげているが、岩田の例からは子どもの頃からの活動連鎖はそれを経験の蓄積として実践できるものであることがわかる。

岩田は、地理学的な発想の原点を「現地での体験にもとづく問題意識と、地域へのこだわり」だという。そして、地理学的方法論を教える場や磨く場がなくなるのは困るとして、3つの改善案を提示している

- ・地域のカタログ作りや台帳作り（自然史学の領域）
- ・基本的な地図作成・マッピング技術習得
- ・他分野との密な協力関係作り

これらは、地理学の基礎としてカリキュラムも必要であるが、それに至るまでの関心と経験がものをいうこと、そしてそれはこの改善案を勉強でなくても生活の中で得られることを岩田のライフ・ヒストリーは示している。

岩田は、「地誌」は「おもしろい」と述べる(岩田, 2000)。岩田の発想と実践をみてみると、そのおもしろさは、地誌でいうところのユニークネス＝独自性ではなく、そこをおもしろいと思う「自分」の見方にある。それによる地誌の記述・ユニークネスは、それをとらえる者の見方によって見いだされるものと換言できよう。地理学として調査記述するおもしろさはそこにある。だからこそ「発見」の歴史にもなる。そういうカタログの積み重ねが自然史＝明らかにされた発見の積み重ねともなる。それは岩田の氷河研究の集大成『氷河地形学』(岩田, 2011b)に著されているように、これまでと違う見方によって、まだまだたくさん未知のことが見えてくる、そして記述できるのである。カタログや台帳づくりも、単に羅列ではなく、取り上げる要素やその配列によっておもしろさや独自性が出てくる。だからこそ、自然をそして世界を描く「大地」の地誌は、それを調べ記述する人のライフ・ヒストリーが投影された結果でもある。

私は総合地球環境学研究所での共同研究プロジェクトをラオス、ヴィエンチャン平野の一天水田農村で実施してきた。その成果を「四次元で描く地誌」と題して日本地理学会2007年度秋期学術大会でシンポジウムを開催し、岩田にコメントをお願いした⁵⁾。そのコメントでは、1地域をさまざまな空間・時間スケールでとらえ、図化していることと、いろいろな分野の入り交じりと集成を評価された。そして、家族レベルでの総合的な生計、10年、20年、30年、50年という中長期変化でとらえる見方、この地域ならではの地域区分を出すことを課題として提示いただいた。今回の小稿でとりあげたのは、岩田の世界のその萌芽と形成期である。岩田一人のライフ・ヒストリーも、そこに生きてきた人と環境との関わり合い、その中での個人、そして築いてきた地理学を記述するという、いわば「地誌」でもある。そしてそれは、さまざまな空間・時間スケール、いろいろな分野の入り交じりによって形成されていることがわかった。人間の生きる姿を環境との関わり合いとして主体性・主体的行為の環境への働きかけからとらえることで、思考の形成が生き生き

と見えてくる。地理学的思考から掘り起こすライフ・ヒストリー研究もできるであろう。

V おわりに

岩田は、地理学は地球表面の研究だという。その表面中の雪氷表面である。氷も固体氷があれば地形学ができる。すでに火星・木星に関して述べている(岩田, 2011)。宇宙時代の地形学は、火星へ!だと飲み屋でうかがった。空想・希望空間は幼少の遠くに見える山から世界へ、小宇宙から宇宙へと広がっている。火星の地理学へ……火星から戻ってきたら「猿の惑星」になっていないよう、後進の一人としてがんばりたい所存である。

注

- 1) パタゴニア探検の成果は、六甲学院山岳会(1969):「パタゴニア氷床横断」岳人268、『六甲学院山岳会パタゴニア登山隊報告』六甲学院山岳会、阪上秀太郎(1970):『パタゴニア氷床横断』芙蓉社にまとめられている。後に地図を作成し『岩と雪』に「パタゴニアの地図と解説」として連載された。
- 2) 卒業論文およびその後の研究成果は、岩田修二(1974):白馬岳山頂付近の地形—地形と残雪・氷河とのかわりあい—。地理, 19(2), 28-37, 小疇 尚・杉原重夫・清水文健・宇都宮陽二郎・岩田修二・岡沢修一(1974):白馬岳の地形学的研究。駿台史学, 35, 1-86。として学術誌に掲載された。
- 3) 修士論文の成果は、岩田修二(1977):根釧原野, 上春別付近の周氷河非対称谷。地理学評論50, 455-470。小疇 尚・野上道男・岩田修二(1974):ひがし北海道の化石周氷河現象とその古気候学的意義「第四紀研究」12(4), 177-191。小疇 尚・野上道男・岩田修二(1974):北海道東部の ice-wedge cast「地学雑誌」83(1), 48-60。として学術誌に掲載された。
- 4) 朴・野中(2003)では、「共感のネットワーク」「認識共同体」という概念を提示したが、まさにその実践が岩田の研究人生歴にあらわれている。
- 5) シンポジウムでは、吉野正敏氏にもコメント者として参加いただいた。この成果は野中健一編(2008)『ヴィエンチャン平野の暮らし—天水田村の多様な環境利用』めこん。として上梓した。

文 献

- 岩田慶二(1985):原風景の構図。岩田慶二編著『子ども文化の原像—文化人類学的視点から』日本放送出版協会, 23-36。
- 岩田修二(1980):ネパール・ヒマラヤでのフィールドワーク。地理25(2), 91-93。
- 岩田修二(1992):登山と地理学。地理37(11), 29-34。
- 岩田修二(1997):氷河学における地理学的方法—日本人によるヒマラヤ氷河研究のはじまり—。中村和郎編『地理学「知」の冒険』古今書院, 89-107。
- 岩田修二(2000):地域研究を地誌に改造する方法:ネパールを例に。地誌研年報9, 33-45。
- 岩田修二(2010):日本列島氷河問題の回顧と現状:1936年から2010年3月まで。山岳105, A41-A79。
- 岩田修二(2011a):貝塚爽平先生から受けた教育。首都大学東京大学院都市環境科学研究科地理学教室『地理学教室50年史—その教育と研究—』21-23。
- 岩田修二(2011b):『氷河地形学』東京大学出版会。
- 岩田修二(2011c):氷河と山岳の研究の魅力と重要性。立教 Summer・2011, 30-33。
- 小泉武栄(1986):「自然と人間の関係」を把握するための調査技術に関する一考察。新地理34(2), 31-39。
- 寺本潔(1994):『子どもの知覚環境』地人書房。
- 成瀬康二・岩田修二・安成哲三・藤井理行(2011):パタゴニア氷河研究の萌芽—1960年代の学術探検—雪氷73(1), 15-27。
- 野中健一(1993):大学生の原風景にみる生活環境の中の自然。環境教育3(1), 2-18。
- 野中健一(2009):「生き物」とは? 「わくわく」とは? 野中健一編『わくわく生き物地理学』たまさや, 3-5。
- 朴恵淑・野中健一(2003):『環境地理学の視座—<自然と人間>関係学をめざして』昭和堂。
- 前田 愛(1972):『文学における原風景—原っぱ・洞窟の幻想』講談社。
- 森脇喜一・白石和行・岩田修二・小嶋 智・鈴木平三・寺井啓・山田清一・佐野雅史(1985):セールロンダーネ山地地学調査報告1985(JARE-26)。南極資料86号, 36-107。
- 早稲田塾ホームページ 首都大学東京大学院都市環境学部地理環境コース岩田修二教授 Good Professor http://www.wasedajuku.com/wasemaga/good-professor/2005/09/post_66.html (2012年1月3日閲覧)



写真1 ナルシスでの岩田(2011年10月野中健一撮影)。



写真2 自宅での岩田(2011年12月野中健一撮影)。



写真3 雪洞を出て夕方ようやくウプサラ氷河涵養域の平らなところに出てほっと一息。ようやく天気が回復してきた。ザイルはまだザックにつけたまま。この後クレバスを踏み抜いた(1969年3月岩田修二撮影)。



写真4 貨客船パシフィック号甲板より喜望峰沖をみる(1969年5月岩田修二撮影)。



写真5 クンブヒマールのジャンボチエの丘から。背後にエベレスト、ローツェ、アマダブラムが聳えている(1975年1月岩田温子撮影)。



写真6 標高4420mハージュンの観測基地(1976年5月岩田修二撮影)。



写真7 セールロンダーネ山地にて。左から：海老名頼利・松岡憲知・岩田・長谷川裕彦(1991年1月第32次観測隊員撮影)。



写真8 雪上車の中での食事。左から：岩田・松岡憲知(1991年2月第32次観測隊員撮影)。